

私の個人主義

夏目漱石

青空文庫

——大正三年十一月二十五日学習院輔仁会において述——

私は今日初めてこの学習院というものの中に這入りました。もつとも以前から学習院は多分この見当だろうぐらいに考えていたには相違ありませんが、はつきりとは存じませんでした。中へ這入ったのは無論今日が初めてでございます。

さきほど岡田さんが紹介かたがたちよつとお話になつた通りこの春何か講演をというご注文でありましたが、その当時は何か差支があつて、——岡田さんの方が当人の私よりよくご記憶と見えてあなたがたにご納得のできるようにただいまご説明がありました。が、とにかくひとまずお断りを致さなければならん事になりました。しかしただお断りを致すのもあまり失礼と存じまして、この次には参りますからという条件をつけ加えておきました。その時念のためこの次はいつごろになりますかと岡田さんに伺いましたら、此年の十月だというお返事であつたので、心のうちに春から十月までの日数を大体繰つてみて、それだけの時間があればそのうちにどうにかできるだろうと思つたものですから、よろしゅうございますとはつきりお受合申したのであります。ところが幸か不幸か病気に

罹りまして、九月いっぱい床についておりますうちにお約束の十月が参りました。十月にはもう臥せってはおりませんでしたけれども、何しろひよろひよろするので講演はちよつとむずかしかつたのです。しかしお約束を忘れてはならないのですから、腹の中では、今に何か云つて来られるだろう来られるだろうと思つて、内々は怖がつていました。

そのうちひよろひよろもついに癒つてしまつたけれども、こちらからは十月末まで何のご沙汰もなく打ち過ぎました。私は無論病氣の事をご通知はしておきませんでした。二の新聞にちよつと出たという話ですから、あるいはその辺の事情を察せられて、誰かが私の代りに講演をやつて下さつたのだろうと推測して安心し出しました。ところへまた岡田さんがまた突然見えたのであります。岡田さんはわざわざ長靴を穿いて見えたのであります。(もつとも雨の降る日であつたからでもありませんが、)そう云つた身拵で、早稲田の奥まで来て下さつて、例の講演は十一月の末まで繰り延ばす事にしたから約束通りやつてもらいたいというご口上なのです。私はもう責任を逃れたように考えていたものですから実は少々驚ろきました。しかしまだ一カ月も余裕があるから、その間にどうかなるだろうと思つて、よろしゅうございますとまたご返事を致しました。

右の次第で、この春から十月に至るまで、十月末からまた十一月二十五日に至るまでの

間に、何か纏まとつたお話をすべき時間はいくらでも拵こしらえられるのですが、どうも少し気分が悪くつて、そんな事を考えるのが面倒めんどうでたまらなくなりました。そこでまあ十一月二十五日が来るまでは構かまうまいという横着りようけんな料簡りょうけんを起おこして、ずるずるべつたりべつたりにその日その日を送おくっていたのです。いよいよと時日ときじつが逼せまつた二三日前にんさんじつぜんになって、何か考えなければならぬという気が少ししたのですが、やはり考えるのが不愉快ふゆかいなので、とうとう絵を描かいて暮くらしてしまいました。絵を描くというと何かえらいものが描けるように聞きこえるかも知れませんが、実は他愛たあいもないものを描いて、それを壁かべに貼はりつけて一人で二日も三日もぼんやり眺ながめているだけなのです。昨日きのうでしたかある人が来て、この絵は大変面白おもしろい——いや面白いと云つたのではありません、面白い気分の時に描いた画えらしく見ると云つてくれたのです。それから私は愉快だから描いたのではない、不愉快だから描いたのだと云つて私の心の状態をその男に説明してやりました。世の中には愉快でじつとしていられない結果を画えにしたり、書かけたり、または文ぶんにしたりする人がある通り、不愉快だから、どうかして好このころもちい心持こころもちになりたいと思つて、筆とを執とつて画えなり文章ぶんしょうなりを作る人もあります。そうして不思議にもこの二つの心的状態が結果に現あらわれたところを見るとよく一致いっちしている場合あひが起おこるのです。しかしこれはほんのついでに申し上あげる事で、話の筋すぢに関係かんけいし

た問題でもありませんから深くは立ち入りません。——何しろ私はその変な面を眺めるだけで、講演の内容をちつとも組み立てずに暮らしてしまつたのです。

そのうちいよいよ二十五日が来たので、否でも応でもここへ顔を出さなければすまない事になりました。それで今朝少し考を纏めてみました。準備がどうも不足のようです。とてもご満足の行くようなお話はできかねますから、そのつもりでご辛防を願います。

この会はいつごろから始まつて今日まで続いているのか存じませんが、そのつどあなたがよその人を連れて来て、講演をさせるのは、一般の慣例として毫も不都合でないとも認めているのですが、また一方から見ると、それほどあなた方の希望するような面白い講演は、いくらどこからどんな人を引張つて来ても容易に聞かれるものではなからうとも思うのです。あなたがたにはただよその人が珍らしく見えるのではありますまいか。

私が落語家から聞いた話の中にこんな諷刺的のがあります。——昔しあるお大名が二人目黒辺へ鷹狩りに行つて、所々方々を馳け廻つた末、大変空腹になつたが、あいにく弁当の用意もなし、家来とも離れ離れになつて口腹を充たす糧を受ける事ができず、仕方なしに二人はそこにある汚ない百姓家へ馳け込んで、何でも好いから食わせると云つたそうです。するとその農家の爺さんと婆さんが気の毒がつて、ありあわせの秋刀魚を炙つ

て二人の大名に麦飯を勧めたと云います。二人はその秋刀魚を肴さかなに非常うまに旨く飯を済まして、そこを立たち出いでたが、翌日になつても昨日の秋刀魚の香かおりがぶんぶん鼻を衝つくといった始末で、どうしてもその味を忘れる事ができないのです。それで二人のうちの一人が他を招待して、秋刀魚のご馳走ちそうをする事になりました。その旨むねうけたまを承うけたまわつて驚ろいたのは家来です。しかし主命しゅめいですから反抗はんこうする訳にも行きませんので、料理人に命じて秋刀魚の細い骨を毛拔けぬきで一本一本抜ぬかして、それを味淋みりんか何かに漬つけたのを、ほどよく焼いて、主人と客とに勧めました。ところが食くう方は腹も減へつていず、また馬鹿ばか丁寧ていねいな料理方で秋刀魚の味を失うつた妙みょうな肴しやくを箸はしで突つついてみたところで、ちつとも旨くないのです。そこで二人が顔を見合せて、どうも秋刀魚は目黒に限るねといったような変な言葉を発したと云うのが話の落おちになつていのですが、私から見ると、この学習院という立派な学校で、立派な先生に始終接つしている諸君が、わざわざ私のようなものの講演を、春から秋の末まで待つてもお聞きになろうというのは、ちようど大牢の美味に飽あいた結果、目黒の秋刀魚がちよつと味わつてみたくなつたのではないかと思われるのです。

この席におられる大森教授は私と同年かまたは前後して大学を出られた方ですが、その大森さんが、かつて私にどうも近ちかごろ頃の生徒は自分の講義をよく聴きかないで困る、どうも

真面目まじめが足りないで不都合ふつごうだというような事を云われた事があります。その評はこの学校の生徒についてではなく、どこかの私立学校の生徒についてだったろうと記憶しています。が、何しろ私はその時大森さんに対して失礼な事を云いました。

ここで繰り返しているのもお恥はずかしい訳ですが、私はその時、君などの講義をありがたがって聴く生徒がどこの国にいるものかと申したのです。もともと私の主意はその時の大森君には通じていなかったかも知れませんが、この機会を利用して、誤解を防いでおきますが、私どもの書生時代、あなたがたと同年輩どうねんばい、もしくはもう少し大きくなった時代、には、今のあなたがたよりよほど横着で、先生の講義などはほとんど聴いた事がないと云っても好いくらいのものでした。もちろんこれは私や私の周囲のものを本位として述べるのでありますから、圈外けんがいにいたものには通用しないかも知れませんが、どうも今の私からふり返ってみると、そんな気がどこかでするように思われるのです。現にこの私は上部うわべだけは温順らしく見えながら、けっして講義などに耳を傾かたむける性質ではありませんでした。始終なま怠けてのらくらしていました。その記憶をもって、真面目な今の生徒を見ると、どうしても大森君のように、彼らを攻撃こうげきする勇氣が出て来ないのです。そう云った意味からして、つい大森さんに対してすまない乱暴を申したのであります。今日は大

森君に詫^{あや}まるためにわざわざ出かけた次第ではありませんけれども、ついでだからみんなのいる前で、謝罪しておくのです。

話がついとんだところへ外^それてしまいましたから、再び元へ引き返して筋の立つように云いますと、つまりこうなるのです。

あなたがたは立派な学校に入つて、立派な先生から始終指導を受けていらつしやる、またその方々の専門的もしくは一^{いっばん}般的^{てき}の講義を毎日聞いていらつしやる。それなのに私みたようなものを、ことさらによそから連れて来て、講演を聴こうとなされるのは、ちょうど先刻お話ししたお大名が目黒の秋刀魚を賞^{しょう}翫^{がん}したようなもので、つまりは珍らしいから、一口食つてみようという料簡じやないかと推察されるのです。實際をいうと、私のよくなものよりも、あなたがたが毎日顔を見ていらつしやる常^{じょう}雇^{やと}いの先生のお話の方がよほど有益でもあり、かつまた面白かろうとも思われるのです。たとい私にしたところで、もしこの学校の教授にでもなつていたならば、単に新しい刺戟^{しげき}のないというだけでも、このくらい的人数が集つて私の講演をお聴きになる熱心なり好奇^{こうき}心なりは起るまいと考^{こう}えるのです。がどんなものでしょう。

私がなぜそんな仮定をするかという、この私は現に昔しこの学習院の教師になろうと

した事があるのです。もつとも自分で運動した訳でもないのですが、この学校にいた知人が私を推薦すいせんしてくれたのです。その時分の私は卒業する間際まで何をして衣食の道を講じていいか知らなかったほどの迂濶うかつもの者でしたが、さていよいよ世間へ出てみると、懐ふところ手てをして待つていたつて、下宿料が入つて来る訳でもないのです、教育者になれるかなれないかの問題はとにかく、どこかへ潜もぐり込む必要があつたので、ついこの知人のいう通りこの学校へ向けて運動を開始した次第であります。その時分私の敵が一人ありました。しかし私の知人は私に向つてしきりに大丈夫だいじょうぶらしい事をいうので、私の方でも、もう任命されたような気分になつて、先生はどんな着物を着なければならぬのかなどと訊きいてみたものです。するとその男はモーニングでなくては教場へ出られないと云いますから、私はまだ事のきまらない先に、モーニングを誂あつらえてしまったのです。そのくせ学習院とはどこにある学校かよく知らなかったのだから、すこぶる変なものです。さていよいよモーニングが出来上できあがつてみると、あに計らんやせつかく頼たのみにしていた学習院の方は落第と事がきまつたのです。そうしてもう一人の男が英語教師の空位を充たす事になりました。その人は何という名でしたか今は忘れてしまいました。別段悔くやしくも何ともなかつたからでしょう。何でも米国帰りの人とか聞いていました。——それで、もしその時にその米国帰

りの人が採用されずに、この私がまぐれ当りに学習院の教師になって、しかも今日まで永続していたなら、こうした鄭重ていちょうなお招きを受けて、高い所からあなたがたにお話をする機会もついに来なかつたかも知れませんまい。それをこの春から十一月までも待つて聴いて下さろうというのは、とりも直さず、私が学習院の教師に落第して、あなたがたから目黒の秋刀魚のように珍らしがられている証拠しょうこではありませんか。

私はこれから学習院を落第してから以後の私について少々申上げようと思います。これは今までお話をして来た順序だからという意味よりも、今日の講演に必要な部分だからと思つて聴いていただきたいのです。

私は学習院は落第したが、モーニングだけは着ていました。それよりほかに着るべき洋服は持つていなかったのだから仕方がありません。そのモーニングを着てどこへ行つたと思ひますか？ その時分は今と違つて就職の途は大変楽でした。どちらを向いても相当の口は開いていたように思われるのです。つまりは人が払底なためだったのでしよう。私のようなものでも高等学校と、高等師範からほとんど同時に口がかかりました。私は高等学校へ周旋しゅうせんしてくれた先輩に半分承諾しょうだくを与えながら、高等師範の方へも好い加減な挨拶あいさつをしてしまったので、事が変な具合にもつれてしまいました。もともと私が若い

から手ぬかりやら、不行届ふゆきとじきがちで、とうとう自分に崇たつて来たと思えば仕方がありませんが、弱らせられた事は事実です。私は私の先輩なる高等学校の古参の教授の所へ呼びつけられて、こつちへ来るような事を云いながら、他ほかにも相談をされては、仲に立った私が困ると云つて譴責けんせきされました。私は年の若い上に、馬鹿の肝癩かんしやくもち持もちですから、いつそ双方そうほうとも断つてしまつたら好いだらうと考えて、その手続きをやり始めたのです。するとある日当時の高等学校長、今ではたしか京都の理科大学長をしている久原さんから、ちよつと学校まで来てくれという通知があつたので、さつそく出かけてみると、その座に高等師範の校長嘉納治五郎かのうじごろうさんと、それに私を周旋してくれた例の先輩がいて、相談はきまつた、こつちに遠慮えんりよは要いらないから高等師範の方へ行つたら好かろうという忠告です。私は行いきがかり上い否いやだとは云えませんが承諾の旨を答えました。が腹の中では厄介やっかいな事になつてしまつたと思わざるを得なかつたのです。というものは今考えるところもつたいない話ですが、私は高等師範などをそれほどありがたく思つていなかったのです。嘉納さんに始めて会つた時も、そうあなたのように教育者として学生の模範もはんになれというような注文だと、私にはとても勤まりかねるからと逡巡しゆんしゆんしたくらいでした。嘉納さんは上手な人ですから、否いやそう正直に断ことわられると、私はますますあなたに来ていただきたくなつたと

云つて、私を離さなかつたのです。こういう訳で、未熟な私は双方の学校を懸持かけもちしようなどという慾張根性よくはりこんじようは更になかつたにかかわらず、関係者に要らざる手数をかけた後、とうとう高等師範の方へ行く事になりました。

しかし教育者として偉くなり得るような資格は私に最初から欠けていたのですから、私はどうも窮屈きゆうくつで恐れ入りました。嘉納さんもあなたはあまり正直過ぎて困ると云つたくらいですから、あるいはもつと横着をきめていてもよかつたのかも知れません。しかしどうあつても私には不向な所ふむきだとしか思われませんでした。奥底のない打ち明けたお話をすると、当時の私はまあ肴屋かじやが菓子家かしやへ手伝てでんいに行つたようなものでした。

一年の後私はとうとう田舎いなかの中学へ赴任ふにんしました。それは伊予いよの松山にある中学校です。あなたがたは松山の中学と聞いてお笑いになるが、おおかた私の書いた「坊ちゃん」でもご覧になつたのでしょうか。「坊ちゃん」の中に赤シャツという渾名あだなをもっている人があるが、あれはいつたい誰の事だと私はその時分よく訊かれたものです。誰の事だつて、当時その中学に文学士と云つたら私一人なのですから、もし「坊ちゃん」の中の人物を一々実在のものとするならば、赤シャツはすなわちこういう私の事にならなければならぬので、——はなはだありがたい仕合せと申上げたいような訳になります。

松山にもたつた一カ年しかおりませんでした。立つ時に知事が留めてくれましたが、もう先方と内約ができていたので、とうとう断つてそこを立ちました。そうして今度は熊本くまもとの高等学校に腰こしを据すえました。こういう順序で中学から高等学校、高等学校から大学と順々に私は教えて来た経験をもつていますが、ただ小学校と女学校だけはまだ足を入れたい試ためしがございません。

熊本には大分長くおりました。突然文部省から英国へ留学をしてはどうかという内談のあつたのは、熊本へ行つてから何年目になりましたか。私はその時留学を断ことわろうかと思いました。それは私のようなものが、何の目的ももたずに、外国へ行ったからと云つて別に国家のために役に立つ訳もなからうと考えたからです。しかるに文部省の内意を取次とりついでくれた教頭が、それは先方の見込みなのだから、君の方で自分を評価する必要はない、ともかくも行つた方が好かろうと云うので、私も絶対に反抗する理由もないから、命令通り英国へ行きました。しかし果はたせるかな何もする事がないのです。

それを説明するためには、それまでの私というものを一応お話ししなければならん事になります。そのお話がすなわち今日の講演の一部分を構成する訳なのですからそのつもりでお聞きを願います。

私は大学で英文学という専門をやりました。その英文学というものはどんなものかとお尋ねになるかも知れませんが、それを三年専攻した私にも何が何だかまあ夢中だったのです。その頃はジクソンという人が教師でした。私はその先生の前で詩を読ませられたり文章を読ませられたり、作文を作って、冠詞が落ちてしていると云って叱られたり、発音が間違っていると怒られたりしました。試験にはウオーズウオーズは何年に生れて何年に死んだとか、シエクスピヤのフォリオは幾通りあるかとか、あるいはスコットの書いた作物を年代順に並べてみるとかという問題ばかり出たのです。年の若いあなた方にもほぼ想像ができるでしょう、はたしてこれが英文学かどうだかという事が。英文学はしばらく措いて第一文学とはどういうものか、これではどうてい解るはずがありません。それなら自力でそれを窮め得るかと言うと、まあ盲目の垣覗きといったようなもので、図書館に入つてどこをどううついても手掛がないのです。これは自力の足りないばかりでなくその道に關した書物も乏しかつたのだらうと思います。とにかく三年勉強して、ついに文学は解らずじまいだったのです。私の煩悶は第一ここに根ざしていたと申し上げても差支ないでしょう。

私はそんなあやふやな態度で世の中へ出てとうとう教師になつたというより教師にされ

てしまったのです。幸に語学の方は怪しいにせよ、どうかこうかお茶を濁して行かれるから、その日その日はまあ無事に済んでいましたが、腹の中は常に空虚でした。空虚ならいつそ思い切りがよかつたかも知れませんが、何だか不愉快な煮え切らない漠然たるものが、至る所に潜んでいるようで堪まらないのです。しかも一方では自分の職業としている教師というものに少しの興味ももち得ないのです。教育者であるという素因の私に欠乏している事は始めから知っていました。ただ教場で英語を教える事がすでに面倒なのでから仕方がありません。私は始終中腰で隙があつたら、自分の本領へ飛び移ろう飛び移ろうとのみ思っていたのですが、さてその本領というのがあるようで、無いようで、どこを向いても、思い切つてやつと飛び移れないのです。

私はこの世に生れた以上何かしなければならん、といって何をして好いか少しも見当がつかない。私はちやうど霧の中に閉じ込められた孤独の人間のように立ち竦んでしまったのです。そうしてどこからか一筋の日光が射して来ないかしらんという希望よりも、こちらから探照灯を用いてたつた一条で好いから先まで明らかに見たいという気がしました。ところが不幸にしてどちらの方角を眺めてもぼんやりしているのです。ぼうつとしているのです。あたかも囊の中に詰められて出る事のできない人のような気持がするのです。私

は私の手にただ一本の錐きりさえあればどこか一方所突き破つて見せるのだがと、焦燥あせり抜ぬいたのですが、あいにくその錐は人から与えられる事もなく、また自分で発見する訳にも行かず、ただ腹の底ではこの先自分はどうなるだろうと思つて、人知れず陰鬱いんうつな日を送つたのであります。

私はこうした不安を抱いだいて大学を卒業し、同じ不安を連れて松山から熊本へ引越ひっこし、また同様の不安を胸の底に畳たたんでついに外国まで渡わたつたのであります。しかしいつたん外国へ留学する以上は多少の責任を新たに自覚させられるにはきまつています。それで私はできただけ骨を折つて何かしようと努力しました。しかしどんな本を読んでも依然いぜんとして自分は囊の中から出る訳に参りません。この囊を突き破る錐は倫敦ロンドン中探して歩いても見つかりそうになかつたのです。私は下宿の一間の中で考えました。つまらないと思ひました。いくら書物を読んでも腹の足たしにはならないのだと諦めあきらめました。同時に何のために書物を読むのか自分でもその意味が解らなくなつて来ました。

この時私は始めて文学とはどんなものであるか、その概がい念ねんを根本的に自力で作りに上げるよりほかに、私を救う途はないのだと悟さとつたのです。今までは全く他人本位で、根のなうきぐさい萍うきぐさのように、そこいらをでたらめに漂ただよつていたから、駄目だめであつたという事によ

く気がついたので。私のここに他人本位というのは、自分の酒を人に飲んでもらって、後からその品評を聴いて、それを理が非でもそうだとしてしまういわゆる人真似ひとまねを指すのです。一口にこう云ってしまえば、馬鹿らしく聞こえるから、誰もそんな人真似をする訳がないと不審ふしんがられるかも知れませんが、事實はけっしてそうではないのです。近頃流行はやするベルグソンでもオイケンでもみんな向うむこうの人がとやかくいうので日本人もその尻馬しりうまに乗って騒ぐさわのです。ましてその頃は西洋人のいう事だと云えば何でもかでも盲従もうじゆうして威張いばつたものです。だからむやみに片仮名を並べて人に吹聴ふいちようして得意がった男が比々皆是みなれなりと云いたいくらいごろごろしていました。他の悪口ひとではありません。こういう私が現にそれだったのです。たとえばある西洋人が甲こうという同じ西洋人の作物を評したのを讀んだとすると、その評の当否はまるで考えずに、自分の腑ふに落ちようが落ちまいが、むやみにその評を触れ散らかすのです。つまり鶉吞うのみと云つてもよし、また機械的の知識と云つてもよし、とうていわが所有とも血とも肉とも云われない、よそよそしいものを我物わがもの顔がおにしやべって歩くのです。しかるに時代が時代だから、またみんながそれを賞めるほのです。

けれどもいくら人に賞められたって、元々人の借着をして威張っているのだから、内心

は不安です。手もなく孔雀くじゃくの羽根を身に着けて威張っているようなものですから。それでもう少し浮華ふかを去って摯実しじつにかなければ、自分の腹の中はいつまで経たったって安心はできないという事に気がつき出したのです。

たとえば西洋人がこれは立派な詩だとか、口調が大変好いとか云っても、それはその西洋人の見るところで、私の参考にならん事はないにしても、私にそう思えなければ、どうして受売うけうりをすべきはずのものではないのです。私が独立した一個の日本人であつて、けつして英国人の奴婢どひでない以上はこれくらいの見識は国民の一員として具そなえていなければならぬ上に、世界に共通な正直という徳義を重んずる点から見ても、私は私の意見を曲げてはならないのです。

しかし私は英文学を専攻する。その本場の批評家のいうところと私の考かんと矛盾むじゆんしてはどうも普通ふつうの場合ばあひが引ける事になる。そこでこうした矛盾がはたしてどこから出るかという事を考えなければならぬ。風俗、人情、習慣しやうはん、溯さかのぼつては国民の性格皆この矛盾の原因になつてゐるに相違ない。それを、普通の学者は単に文学と科学とを混同して、甲の国民に氣に入るものはきつと乙おつの国民の賞讃を得るにきまつてゐる、そうした必然性ふくが含まれてゐると誤認してかかる。そこが間違つてゐると云わなければならぬ。たといこ

の矛盾を融和する事が不可能にしても、それを説明する事はできるはずだ。そうして単にその説明だけでも日本の文壇には一道の光明を投げ与える事ができる。——こう私はその時始めて悟つたのでした。はなはだ遅まきの話で慚愧の至でありますけれども、事実だから偽らないところを申し上げるのです。

私はそれから文芸に対する自己の立脚地を堅めるため、堅めるといふより新らしく建設するために、文芸とは全く縁のない書物を読み始めました。一口でいうと、自己本位という四字をようやく考えて、その自己本位を立証するために、科学的な研究やら哲学的の思索に耽り出したのであります。今は時勢が違いますから、この辺の事は多少頭のある人にはよく解せられてはいるはずですが、その頃は私が幼稚な上に、世間がまだそれほど進んでいなかったので、私のやり方は実際やむをえなかつたのです。

私はこの自己本位という言葉を自分の手に握つてから大変強くなりました。彼ら何者ぞやと感慨が生まれました。今まで茫然と自失していた私に、ここに立つて、この道からこう行かなければならないと指図をしてくれたものは実にこの自我本位の四字なのであります。自白すれば私はその四字から新たに立出したのであります。そうして今のようにただ人の尻馬にばかり乗って空騒ぎをしているようでははなはだ心元ない事だから、そう西洋人

ぶらないでも好いという動かすべからざる理由を立派に彼らの前に投げ出してみたら、自分もさぞ愉快だろう、人もさぞ喜ぶだろうと思つて、著書その他の手段によつて、それを成就するのを私の生涯の事業としようと考えたのです。

その時私の不安は全く消えました。私は軽快な心をもつて陰鬱な倫敦を眺めたのです。比喩で申すと、私は多年の間懊惱した結果ようやく自分の鶴嘴をがちりと鉋脈に掘り当てたような気がしたのです。なお繰り返していうと、今まで霧の中に閉じ込まれたものが、ある角度の方向で、明らかに自分の進んで行くべき道を教えられた事になるのです。

かく私が啓発された時は、もう留学してから、一年以上経過していたのです。それでも外国では私の事業を仕上る訳に行かない、とにかくできるだけ材料を纏めて、本国へ立ち帰つた後、立派に始末をつけようという気になりました。すなわち外国へ行つた時よりも帰つて来た時の方が、偶然ながらある力を得た事になるのです。

ところが帰るや否や私は衣食のために奔走する義務がさつそく起りました。私は高等学校へも出ました。大学へも出ました。後では金が足りないのです、私立学校も一軒稼ぎました。その上私は神経衰弱に罹りました。最後に下らない創作などを雑誌に載せなければならぬ仕儀に陥りました。いろいろの事情で、私は私の企てた事業を半途中で中止し

てしまいました。私の著作あらかした文学論はその記念というよりもむしろ失敗の亡骸なきがらです。しかも畸形児きけいじの亡骸なきがらです。あるいは立派に建設されないうちに地震じしんで倒たおされた未成市街の廃墟はいきよのようなものです。

しかしながら自己本位というその時得た私の考は依然としてつづいていきます。百年を経るに従ってだんだん強くなります。著作的事業としては、失敗に終わりましたけれども、その時確かに握った自己が主で、他は賓ひんであるという信念は、今日の私に非常の自信と安心を与えてくれました。私はその引続きとして、今日なお生きていられるような心持がします。実はこうした高い壇の上に立つて、諸君を相手に講演をするのもやはりその力のお蔭かげかも知れません。

以上はただ私の経験だけをざっとお話ししたのでありますけれども、そのお話しを致した意味は全くあなたがたのご参考になりはしまいかという老婆心らうばしんからなのであります。あなたがたはこれからみんな学校を去って、世の中へお出かけになる。それにはまだ大分時間のかかる方もございましょうし、またはおっつけ実社会に活動なさる方もあるでしょうが、いずれも私の一度経過した煩悶はんもん（たとい種類は違っても）を繰返くりかえしがちなものじゃなからうかと推察されるのです。私のようにどこか突き抜けたくつても突き抜ける訳

にも行かず、何か掴つかみたくつても薬やかん缶あたま頭あたまを掴むようにつるつるして焦燥しじれつたくなったりする人が多分あるだろうと思うのです。もしあなたがたのうちですでに自力で切り開いた道を持つている方は例外であり、また他ひとの後に従って、それで満足して、在来ざいらいの古い道を進んで行く人も悪いとはけつして申しませんが、（自己に安心と自信がしっかり附随ふすいしているならば、）しかしもしそうでないとしたならば、どうしても、一つ自分の鶴嘴つづで掘り当てるところまで進んで行かなくつてはいけません。いけないというのは、もし掘りあてる事ができなかつたなら、その人は生涯不愉快で、始終中腰ちゆうようになって世の中にまごまごしていなければならぬからです。私のこの点を力説するのは全くそのためで、何も私を模範もはんになさいという意味ではけつしてないのです。私のようなつまらないものでも、自分で自分が道をつけつつ進み得たという自覚があれば、あなた方から見てその道がいかに下らないにせよ、それはあなたがたの批評と観察で、私には寸毫すんこうの損害がないのです。私自身はそれで満足するつもりであります。しかし私自身わたしがそれがため、自信と安心をもっているからといって、同じ径路けいろがあなたがたの模範になるとはけつして思っていないのですから、誤解してはいけません。

それはとにかく、私の経験したような煩悶ぼんもんがあなたがたの場合にもしばしば起るに違い

ないと私は鑑定かんていしているのですが、どうでしょうか。もしそうだとすると、何かに打ち当るまで行くという事は、学問をする人、教育を受ける人が、生涯の仕事としても、あるいは十年二十年の仕事としても、必要じゃないでしょうか。ああここにおれの進むべき道があつた！ ようやく掘り当てた！ こういう感投詞を心の底から叫び出される時、あなたがたは始めて心を安んずる事ができるのでしよう。容易に打ち壊こわされない自信が、その叫び声とともにむくむく首を擡もたげて来るのではありませんか。すでにその域に達している方も多数のうちにはあるかも知れませんが、もし途中で霧もやか靄もやのために懊惱もうぼうしていられる方があるならば、どんな犠牲ぎせいを払はらつても、ああここだという掘当ほりあてるところまで行つたらよろしかろうと思うのです。必ずしも国家のためばかりだからというわけではありません。またあなた方のご家族のために申し上げる次第でもありません。あなたがた自身の幸福のために、それが絶対に必要じゃないかと思うから申上げるのです。もし私の通つたような道を通り過ぎた後なら致し方もないが、もしどこかにこだわりがあるなら、それを踏潰ふみつぶすまで進まなければ駄目ですよ。——もつとも進んだつてどう進んで好いか解らないのだから、何かにぶつかる所まで行くよりほかに仕方がないのです。私は忠告がましい事をあなたに強い気はまるでありませんが、それが将来あなたがたの幸福の一つになるか

も知れないと思うと黙だまっていられなくなるのです。腹の中の煮え切らない、徹底てつていしない、ああでもありこうでもあるというような海鼠なまこのような精神を抱いだいてぼんやりしては、自分が不愉快ではないか知らんと思うからいのです。不愉快でないとおっしゃればそれまでです、またそんな不愉快は通り越こしてるとおっしゃれば、それも結構であります。願ねがくは通り越こしてありたいと私は祈いのるのであります。しかしこの私は学校を出て三十以上まで通り越せなかつたのです。その苦痛は無どん論鈍痛つうではありましたが、年々歳さい々感いずる痛いたみには相違なかつたのであります。だからもし私のような病気に罹かつた人が、もしこの中にあるならば、どうぞ勇ゆう猛もうにお進すすみにならん事を希望してやまないのです。もしそこまで行ければ、ここにおれの尻しりを落ちつける場所があつたのだという事実をご発見はつになって、生涯の安心と自信を握にぎる事ができるようになると思うから申し上げるのです。

今まで申し上げた事はこの講演の第一べん篇へんに相当するものですが、私はこれからその第二篇に移ろうかと考えます。学習院という学校は社会的地位の好い人が這入る学校のように世間よから見倣みなされております。そうしてそれがおそらく事実なのでしよう。もし私の推察通り大した貧民はここへ来ないで、むしろ上流社会の子弟ばかりが集まっているとすれば、向後あなたがたに附随ふずいしてくるものうちで第一番に挙げなければならぬのは権力であ

ります。換言^{かんげん}すると、あなた方が世間へ出れば、貧民が世の中に立つた時よりも余計権力が使えるという事なのです。前申した、仕事をして何かに掘りあてるまで進んで行くという事は、つまりあなた方の幸福のため安心のためには相違ありませんが、なぜそれが幸福と安心とをもたらすかという点、あなた方のもつて生れた個性がそこにぶつかって始めて腰がすわるからでしょう。そうしてそこに尻を落ちつけてだんだん前の方へ進んで行くとその個性がますます発展して行くからでしょう。ああここにおれの安住の地位があつたと、あなた方の仕事とあなたがたの個性が、しっくり合った時に、始めて云い得るのでしよう。

これと同じような意味で、今申し上げた権力というものを吟味^{ぎんみ}してみると、権力とは先刻^{つぎ}お話しした自分の個性を他人の頭の上に無理矢理に押しつける道具なのです。道具だと断然云い切つてわるければ、そんな道具に使い得る利器なのです。

権力に次ぐものは金力です。これもあなたがたは貧民よりも余計に所有しておられるに相違ない。この金力を同じくそうした意味から眺めると、これは個性を拡張するために、他人の上に誘惑^{ゆうわく}の道具として使用し得る至極重宝なものになるのです。

してみると権力と金力とは自分の個性を貧乏^{びんぼうにん}人より余計に、他人の上に押し被^{かぶ}せると

か、または他人をその方面に誘き寄せるとかいう点において、大變便宜な道具だと云わなければなりません。こういう力があるから、偉いようであり、その実非常に危険なのです。先刻申した個性はおもに学問とか文芸とか趣味とかについて自己の落ちつくべき所まで行って始めて発展するようにお話し致したのですが、実をいうとその応用ははなはだ広いもので、単に学芸だけにはとどまらないのです。私の知っている兄弟で、弟の方は家に引込んで書物などを読む事が好きなのに引き易えて、兄はまた釣道楽に憂身をやつしているのがあります。するとこの兄が自分の弟の引込思案でただ家にばかり引籠っているのを非常に忌まわしいもののように考えるのです。必竟は釣をしないからああいう風に厭世的になるのだと合点して、むやみに弟を釣に引張り出そうとするのです。弟はまたそれが不愉快でたまらないのだけれども、兄が高圧的に釣竿を担がしたり、魚籃を提げさせたりして、釣堀へ随行を命ずるものだから、まあ目を瞑ってくっついて行って、気味の悪い鮒などを釣つていやいや帰ってくるのです。それがために兄の計画通り弟の性質が直ったかという、けつしてそうではない、ますますこの釣というものに対して反抗心を起してくるようになります。つまり釣と兄の性質とはぴたりと合つてその間に何の隙間もないのでしようが、それはいわゆる兄の個性で、弟とはまるで交渉がないのです。これ

はもとより金力の例ではありません、権力の他を威圧する説明になるのです。兄の個性が弟を^{あっぱく}圧迫して無理に魚を釣らせるのですから。もつともある場合には、——例えば授業を受ける時とか、兵隊になった時とか、また寄宿舎でも軍隊生活を主位におくとか——すべてそう云った場合には多少この高圧的手段は免^{まぬ}かれますまい。しかし私はおもにあなたが^{いっぽんたち}一本立になつて世間へ出た時の事を云っているのだからそのつもりで聴いて下さらなくては困ります。

そこで前申した通り自分が好いと思つた事、好きな事、自分と性の合う事、幸にそこへぶつかつて自分の個性を發展させて行くうちには、自他の区別を忘れて、どうかあいつもおれの仲間^ひに引き摺^ずり込んでやろうという気になる。その時権力があると前云つた兄弟のような変な関係が出来上るし、また金力があると、それをふりまいて、^{ひと}他を自分のようなものに仕立上げようとする。すなわち金を誘惑の道具として、その誘惑の力で他を自分に気に入るように変化させようとする。どつちにしても非常な危険が起るのです。

それで私は常からこう考えています。第一にあなたがたは自分の個性が發展できるような場所に尻を落ちつけべく、自分とぴたりと合つた仕事を発見するまで^{まいしん}邁進しなければ一生の不幸であると。しかし自分がそれだけの個性を尊重し得るように、社会から許され

るならば、他人に対してもその個性を認めて、彼らの傾向を尊重するのが理の当然になって来るでしょう。それが必要でかつ正しい事としか私には見えません。自分は天性右を向いているから、あいつが左を向いているのは怪しからんというのは不都合じゃないかと思うのです。もつとも複雑な分子の寄つて出来上つた善悪とか邪正とかいう問題になると、少々込み入つた解剖の力を借りなければ何とも申されませんが、そうした問題の關係して来ない場合もしくは關係しても面倒でない場合には、自分が他から自由を享有している限り、他にも同程度の自由を与えて、同等に取り扱わなければならん事と信ずるよりほかに仕方がないのです。

近頃自我とか自覚とか唱えていくら自分の勝手な真似をしても構わないという符徴に使うようですが、その中にははなはだ怪しいのがたくさんあります。彼らは自分の自我をあくまで尊重するような事を云いながら、他人の自我に至つては毫も認めていないのです。いやしくも公平の眼を具し正義の觀念をもつ以上は、自分の幸福のために自分の個性を發展して行くと同時に、その自由を他にも与えなければすまん事だと私は信じて疑わないのです。我々は他が自己の幸福のために、己れの個性を勝手に發展するのを、相当の理由なくして妨害してはならないのであります。私はなぜここに妨害という字を使うかという

と、あなたがたは正しく妨害し得る地位に将来立つ人が多くからです。あなたがたのうちには権力を用い得る人があり、また金力を用い得る人がたくさんあるからです。

元来をいうなら、義務の附着しておらない権力というものが世の中にあるうはずがないのです。私がこうやって、高い壇の上からあなたの方を見下して、一時間なり二時間なり私の云う事をせいしゆく静肅せいしゆくに聴いていただく権利を保留する以上、私の方でもあなたの方を静肅にさせるだけの説を述べなければすまないはずだと思ひます。よし平へいほん凡ほんな講演をするにしても、私の態度なり様子なりが、あなたがたをして礼を正さしむるだけの立派さをもつていなければならんはずのものであります。ただ私はお客である、あなたがたは主人である、だからおとなしくしなくてはならない、とこう云おうとすれば云われない事もないでしょうが、それは上うわつら面の礼式にとどまる事で、精神には何の関係もない云わばいんしゆう因襲いんしゆうといったようなものですから、てんで議論にはならないのです。別の例を挙げてみますと、あなたがたは教場で時々先生から叱られる事があるでしょう。しかし叱りつ放しの先生がもし世の中にあるとすれば、その先生は無論授業をする資格のない人です。叱る代りには骨を折って教えてくれるにきまっています。叱る権利をもつ先生はすなわち教える義務をもっているはずなのですから。先生は規律をただすため、秩ちつじよ序じよを保つために与えられた

権利を十分に使うでしょう。その代りその権利と引き離す事のできない義務も尽さなければ、教師の職を勤め終せる訳に行きませんまい。

金力についても同じ事であります。私の考によると、責任を解しない金力家は、世の中にあつてならないものなのです。その訳を一口にお話しするところになります。金銭というものは至極重宝なもので、何へでも自由自在に融通が利く。たとえば今私がここで、相場をして十万円儲けたとすると、その十万円の家屋を立てる事もできるし、書籍を買う事もできるし、または花柳社界を賑わす事もできるし、つまりどんな形にでも變つて行く事ができます。そのうちでも人間の精神を買う手段に使用できるのでから恐ろしいではありませんか。すなわちそれをふりまいて、人間の徳義心を買ひ占める、すなわちその人の魂を墮落させる道具とするのです。相場で儲けた金が徳義的倫理的に大きな威力をもつて働らき得るとすれば、どうしても不都合な応用と云わなければならぬかと思われます。思われるのですけれども、實際その通りに金が活動する以上は致し方がない。ただ金を所有している人が、相当の徳義心をもつて、それを道義上害のないように使いこなすよりほかに、人心の腐敗を防ぐ道はなくなってしまうのです。それで私は金力には必ず責任がついて廻らなければならぬといいたくなります。自分は今これだけの富の所有者であ

るが、それをこういう方面にこう使えば、こういう結果になるし、ああいう社会にああ用いればああいう影響がある。と呑み込むだけの見識を養成するばかりでなく、その見識に応じて、責任をもつてわが富を所置しなければ、世の中にすまないと云うのです。いな自分自身にもすむまいというのです。

今までの論旨をかい摘んでみると、第一に自己の個性の発展を仕遂げようと思うならば、同時に他人の個性も尊重しなければならぬという事。第二に自己の所有している権力を使用しようと思うならば、それに附随している義務というものを心得なければならぬという事。第三に自己の金力を示そうと願うなら、それに伴う責任を重じなければならぬという事。つまりこの三カ条に帰着するのであります。

これをほかの言葉で言い直すと、いやしくも倫理的に、ある程度の修養を積んだ人でなければ、個性を発展する価値もなし、権力を使う価値もなし、また金力を使う価値もないという事になるのです。それをもう一遍云い換えると、この三者を自由に享け楽しむためには、その三つのものの背後にあるべき人格の支配を受ける必要が起つて来るといふのです。もし人格のないものがむやみに個性を発展しようとする、他を妨害する、権力を用いようとすると、濫用に流れる、金力を使おうとすれば、社会の腐敗をもたらす。ずい

ぶん危険な現象を呈^{てい}するに至るのです。そうしてこの三つのものは、あなたがたが将来において最も接近しやすいものであるから、あなたがたはどうしても人格のある立派な人間になつておかなくてははいけないだろうと思ひます。

話が少し横へそれますが、ご存じの通り英吉利^{イギリス}という国は大變自由を尊ぶ国であります。それほど自由を愛する国でありながら、また英吉利ほど秩序の調つた国はありません。實をいうと私は英吉利を好かないのです。嫌^{きら}いではあるが事實だから仕方なしに申し上げます。あれほど自由でそうしてあれほど秩序の行き届いた国は恐らく世界中にないでしょう。日本などはとうてい比較^{ひかく}にもなりません。しかし彼らはただ自由なわけではありません。自分の自由を愛するとともに他の自由を尊敬するように、小供の時分から社会的教育をちゃんと受けているのです。だから彼らの自由の背後にはきつと義務という觀念が伴つています。England expects every man to do his dutyといった有名なネルソンの言葉はけつして当座限りの意味のものではないのです。彼らの自由と表裏して發達して来た深い根柢^{こんてい}をもつた思想^{ちがひ}に違^{ちが}ないのです。

彼らは不平があるとよく示威運動をやります。しかし政府はけつして干^{かん}渉^{しょう}がましい事をしません。黙つて放つておくのです。その代り示威運動をやる方でもちやんと心得て

いて、むやみに政府の迷惑めいわくになるような乱暴は働かないのです。近頃女権拡張論者と云ったようなものがむやみに狼藉ろうぜきをするように新聞などに見えています。あれはまあ例外です。例外にしては数が多過ぎると云われればそれまでですが、どうも例外と見るよりほかに仕方がないようです。嫁よめに行かれないとか、職業が見つからないとか、または昔しから養成された、女を尊敬するという気風につけ込むのか、何しろあれは英国人の平生の態度ではないようです。名画を破る、監獄かんごくで断食だんじきして獄丁ごくていを困らせる、議会のベンチからだへ身体からだを縛りしばつけておいて、わざわざ騒そうぞう々しく叫び立てる。これは意外の現象ですが、ことによると女は何をしても男の方で遠慮するから構わないという意味でやっているのかも分りません。しかしまあどうい理由にしても変則らしい気がします。一般の英国氣質というものは、今お話した通り義務の觀念を離れない程度において自由を愛しているようです。

それで私は何も英国を手本にするという意味ではないのですけれども、要するに義務心を持つていない自由は本当の自由ではないと考えます。と云うものは、そうしたわがままな自由はけつして社会に存在し得ないからであります。よし存在してもすぐ他から排斥はいせきされ踏み潰つぶされるにきまつているからです。私はあなたがたが自由にあらん事を切望する

ものであります。同時にあなたがたが義務というものを納得せられん事を願つてやまない
のであります。こういう意味において、私は個人主義だと公言して憚らないつもりです。

この個人主義という意味に誤解があつてはいけません。ことにあなたがたのようなお若い
人に対して誤解を吹き込んで私ですみませんから、その辺はよくご注意を願つておき
ます。時間が逼つているからなるべく単簡に説明致しますが、個人の自由は先刻お話しした
個性の發展上極めて必要なものであつて、その個性の發展がまたあなたがたの幸福に非常
な關係を及ぼすのだから、どうしても他に影響のない限り、僕は左を向く、君は右を向い
ても差支ないくらいの自由は、自分でも把持し、他人にも附与しなくてはなるまいかと考
えられます。それがとりも直さず私のいう個人主義なのです。金力権力の点においてもそ
の通りで、俺の好かないやつだから畳んでしまえとか、気に喰わない者だからやつつけて
しまえとか、悪い事もないのに、ただそれらを濫用したらどうでしょう。人間の個性は
それで全く破壊されると同時に、人間の不幸もそこから起らなければなりません。たとえ
ば私が何も不都合を働らかないのに、単に政府に気に入らないからと云つて、警視總監
が巡查に私の家を取り巻かせたらどんなものでしょう。警視總監にそれだけの権力はあ
るかも知れないが、徳義はそういう権力の使用を彼に許さないのであります。または三井

とか岩崎とかいう豪商が、私を嫌うというだけの意味で、私の家の召使を買収して事ごとに私に反抗させたなら、これまたどんなものでしょう。もし彼らの金力の背後に人格というものが多少でもあるならば、彼らはけっしてそんな無法を働らく気にはなれないのであります。

こうした弊害はみな道義上の個人主義を理解し得ないから起るので、自分だけを、権力なり金力なりで、一般に推し広めようとするわがままにほかならぬのであります。だから個人主義、私のここに述べる個人主義というものは、けっして俗人の考えているように国家に危険を及ぼすものでも何でもないのです、他の存在を尊敬すると同時に自分の存在を尊敬するというのが私の解釈なのですから、立派な主義だろうと私は考えているのです。

もつと解りやすく云えば、党派心がなくなつて理非がある主義なのです。朋党を結び団隊を作つて、権力や金力のために盲動しないという事なのです。それだからその裏面には人に知られない淋しさも潜んでいるのです。すでに党派でない以上、我は我の行くべき道を勝手に行くだけで、そうしてこれと同時に、他人の行くべき道を妨げないのだから、ある時ある場合には人間がばらばらにならなければなりません。そこが淋しいのです。私がかつて朝日新聞の文芸欄を担任していた頃、だれであつたか、三宅雪嶺さんの悪口

を書いた事がありました。もちろん人身攻撃ではないので、ただ批評に過ぎないのです。しかもそれがたった二三行あったのです。出たのはいつごろでしたか、私は担任者であつたけれども病気をしたからあるいはその病氣中かも知れず、または病氣中でなくつて、私が出して好いと認定したのかも知れません。とにかくその批評が朝日の文芸欄に載つたのです。すると「日本及び日本人」の連中が怒りました。私の所へ直接にはかけ合わなかつたけれども、当時私の下働きをしていた男に取^{とりけし}消を申し込んで来ました。それが本人からではないのです。雪嶺さんの子分——子分というは何だか博奕^{ばくちうち}打のようでおかしいが、——まあ同人といったようなものでしょう、どうしても取り消せというのです。それが事実の問題ならもつともですけれども、批評なんだから仕方がないじゃありませんか。私の方ではこちらの自由だというよりほかに途はないのです。しかもそうした取消を申し込んだ「日本及び日本人」の一部では毎号私の悪口を書いている人があるのだからなおのこと人を驚ろかせるのです。私は直接談判はしませんでしたけれども、その話を間接に聞いた時、変な心^{こころもち}持^{もち}がしました。というのは、私の方は個人主義でやっているのに反して、向うは党派主義で活動しているらしく思われたからです。当時私は私の作物をわるく評したもののさえ、自分の担任している文芸欄へ載せたくらいですから、彼らのいわゆる同人な

るものが、一度に雪嶺さんに対する評語が気に入らないと云って怒ったのを、驚ろきもしたし、また変にも感じました。失礼ながら時代後れだとも思いました。封建時代の人間の団隊のようにも考えました。しかしそう考えた私はついに一種の淋しさを脱却する訳に行かなかつたのです。私は意見の相違はいかに親しい間柄でもどうする事もできないと思つていましたから、私の家に出入りをする若い人達に助言はしても、その人々の意見の発表に抑圧を加えるような事は、他に重大な理由のない限り、けつしてやつた事がないのです。私は他の存在をそれほど認めている、すなわち他にそれだけの自由を与えているのです。だから向うの気が進まないのに、いくら私が汚辱を感ずるような事があつても、けつして助力は頼めないのです。そこが個人主義の淋しきです。個人主義は人を目標として向背を決する前に、まず理非を明らかに、去就を定めるのだから、ある場合にはたつた一人ぼっちになつて、淋しい心持がするのです。それはそのはずです。榎維まきざつ木ぼくでも束たばになつていれば、心丈夫こころじょうぶですから。

それからもう一つ誤解を防ぐために一言しておきたいのですが、何だか個人主義といふとちよつと国家主義の反対で、それを打ち壊すように取られますが、そんな理窟りくつの立たない漫然まんぜんとしたものではないのです。いったい何々主義という事は私のあまり好まないとい

ところで、人間がそう一つ主義に片づけられるものではあるまいとは思いますが、説明のためですから、ここにはやむをえず、主義という文字の下にいろいろの事を申し上げます。ある人は今の日本はどうしても国家主義でなければ立ち行かないように云いふらしたもう考えています。しかも個人主義なるものを蹂躪じゅうりつしなければ国家が亡びほろぶような事を唱道するものも少なくはありません。けれどもそんな馬鹿気たはずはけっしてありやうがないのです。事実私共は国家主義でもあり、世界主義でもあり、同時にまた個人主義でもあるのであります。

個人の幸福の基礎きそとなるべき個人主義は個人の自由がその内容になっているには相違ありませんが、各人の享きやう有ゆうするその自由というものは国家の安危に従って、寒暖計のように上つたり下つたりするのです。これは理論というよりもむしろ事実から出る理論と云つた方が好いかも知れませんが、つまり自然の状態がそうなって来るのです。国家が危くなれば個人の自由が狭せばめられ、国家が泰たい平へいの時には個人の自由が膨ぼう脹ちようして来る、それが当然の話です。いやしくも人格のある以上、それを踏み違えて、国家の亡びるか亡びないかという場合に、疝かんちが違ちがいをしてただむやみに個性の発展ばかりめがけている人はないはずで、私のいう個人主義のうちには、火事が済んでもまだ火事頭巾ずきんが必要だと云つて、

用もないのに窮屈がる人に対する忠告も含まれていると考えて下さい。また例になります
が、昔し私が高等学校にいた時分、ある会を創設したものがありません。その名も主意も
詳しい事は忘れてしまいましたが、何しろそれは国家主義を標榜ひょうぼうしたやかましい会で
した。もちろん悪い会でも何でもありません。当時の校長の木下広次さんなどは大分肩を
入れていた様子でした。その会員はみんな胸にめだるを下げていました。私はめだるだけ
はご免蒙めんもうむりましたが、それでも会員にはされたのです。無論発起人でないから、ずいぶん
異存もあつたのですが、まあ入つても差支なからうという主意から入会しました。ところ
がその発会式が広い講堂で行なわれた時に、何かの機はずみでしたらう、一人の会員が壇上に立
つて演説めいた事をやりました。ところが会員ではあつたけれども私の意見には大分反対
のところもあつたので、私はその前ずいぶんその会の主意を攻撃していたように記憶して
います。しかるにいよいよ発会式となつて、今申した男の演説を聴いてみると、全く私の
説の反駁はんぱくに過ぎないのです。故意だか偶然だか解りませんが、私も勢い私はそれに対し
て答弁の必要が出て来ました。私は仕方なしに、その人のあとから演壇に上りました。当
時の私の態度なり行儀なりははなはだ見苦しいものだと思いますが、それでも簡潔に云う
事だけは云つて退のけました。ではその時何と云つたかとお尋ねになるかも知れませんが、

それはすこぶる簡単なのです。私はこう云いました。——国家は大切かも知れないが、そう朝から晩まで国家国家と云つてあたかも国家に取りつかれたような真似はどうてい我々のできる話でない。常住坐臥じょうじゆうざが国家の事以外を考えてならないという人はあるかも知れないが、そう間断なく一つ事を考えている人は事実あり得ない。豆腐屋とうふが豆腐を売つてあるのは、けつして国家のために売つて歩くのではない。根本的の主意は自分の衣食の料を得るためである。しかし当人はどうあるともその結果は社会に必要なものを供するという点において、間接に国家の利益になつていくかも知れない。これと同じ事で、今日の午ひるに私は飯を三杯ぱいたべた、晩にはそれを四杯に殖ふやしたというのも必ずしも国家のために増減したのではない。正直に云えば胃の具合できめたのである。しかしこれらも間接の間接に云えば天下に影響しないとは限らない、否觀方みかたによつては世界の大勢に幾分いくぶんか関係していいとも限らない。しかしながら肝心かんじんの当人はそんな事を考えて、国家のために飯を食わせられたり、国家のために顔を洗わせられたり、また国家のために便所に行かせられたりしては大変である。国家主義を奨励しょうれいするのはいくらしても差支ないが、事実できない事をあたかも国家のためにするごとくに装よそおうのは偽りである。——私の答弁はざつとこんなものであります。

いつたい国家というものが危くなれば誰だつて国家の安否を考えないものは一人もない。国が強く戦争の憂うれいが少なく、そうして他から犯される憂がなければいほど、国家的觀念は少なくなつてしかるべき訳で、その空虚を充たすために個人主義が這入つてくるのは理の当然と申すよりほかに仕方がないのです。今の日本はそれほど安泰でもないでしょう。貧乏である上に、国が小さい。したがつていつどんな事が起つてくるかも知れない。そういう意味から見て吾々は国家の事を考えていなければならぬのです。けれどもその日本が今が今潰れるとか滅亡めつぼうの憂目にあうとかいう国柄でない以上は、そう国家国家と騒ぎ廻る必要はないはずです。火事の起らない先に火事装束しょうぞくをつけて窮屈な思いをしながら、町内中駈かけ歩くのと一般であります。必竟ずるにこういう事は實際程度問題で、いよいよ戦争が起つた時とか、危急存亡の場合とかになれば、考えられる頭の人、——考えなくてははられない人格の修養の積んだ人は、自然そちらへ向いて行く訳で、個人の自由を束縛そくばし個人の活動を切りつめても、国家のために尽すようになるのは天然自然と云つていくらいなものです。だからこの二つの主義はいつでも矛盾して、いつでも撲殺ぼくさつし合うなどというような厄介なものでは万々ないと私は信じているのです。この点についても、もつと詳しく申し上げたいのですけれども時間がないからこのくらいにして切り上げてお

きます。ただもう一つご注意までに申し上げておきたいのは、国家的道德というものは個人的道德に比べると、ずっと段の低いもののように見える事です。元来国と国とは辞令はいくらやかましくつても、徳義心はそんなにありやしません。詐欺さぎをやる、ごまかしをやる、ペテンにかける、めちやくちやなものであります。だから国家を標準とする以上、国家を一团と見る以上、よほど低級な道德に甘あまんじて平気でいなければならぬのに、個人主義の基礎から考えると、それが大変高くなつて来るのですから考えなければなりません。だから国家の平穩へいおんな時には、徳義心の高い個人主義にやはり重きをおく方が、私にはどうしても当然のように思われます。その辺は時間がないから今日はそれより以上申上げる訳に参りません。

私はせっつかくのご招待だから今日まかり出て、できるだけ個人の生涯を送らるべきあなたがたに個人主義の必要を説きました。これはあなたがたが世の中へ出られた後、幾分かご参考になるだろうと思ふからであります。はたして私のいう事が、あなた方に通じたかどうか、私には分りませんが、もし私の意味に不明のところがあるとすれば、それは私の言い方が足りないか、または悪いかだろうと思ひます。で私の云うところに、もし曖昧あいまいの点があるなら、好い加減にきめないで、私の宅までおいで下さい。できるだけはいつで

も説明するつもりでありますから。またそうした手数を尽さないでも、私の本意が充じゆうぶ分ぶんご会得かいとくになったなら、私の満足はこれに越した事はありません。あまり時間が長くなりますからこれでご免を蒙ります。

青空文庫情報

底本：「ちくま日本文学全集 夏目漱石」筑摩書房

1992（平成4）年1月20日第1刷発行

底本の親本：「夏目漱石全集10」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年7月26日第1刷発行

入力：真先芳秋

校正：かとうかおり

1998年11月19日公開

2008年10月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

私の個人主義

夏目漱石

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>